

目で見ると和牛

- 生産頭数は、昭和37年までは、上向の増頭線を辿っておったが、昭和38年はかつてない天災に遭遇し、農業自体の大きい変革期に当り、下向傾向を示した。
- と殺頭数は、昭和30年より大体一定の線を辿っているが、38年は食肉消費の波に乗って、和牛生産農家が天災による収入減と食料不足により、生産牛すら肉畜としてと殺されたため、急激な増頭数になったものと思う。
- 今度の和牛飼育頭数及び子牛の生産頭数は、昭和38年における繁殖牛の消費により、大きな変化をきたし、昭和39年においては、極度の後退線が現われることが予測され、この悪影響はかなり存続するものと思われる。
- 消費と生産のアンバランスから、今日、低迷している牛価も漸次回復の方向を辿るものと思われる。

※資料・・・と殺頭数は県衛生部、県外移出頭数及び生産頭数は総合畜産調べ。

生産頭数・県外移出頭数並びにと殺頭数(38年度資料)

